

加齢黄斑変性

吉村 長久 (執筆)

辻川 明孝, 大谷 篤史, 田村 寛 (執筆協力)

加齢黄斑変性 (AMD) は, 近年, 高齢者の失明の最大の原因となり, 社会的な関心も急速に高まっている。一方で, その実体を明確に説明できる人はほとんどいないであろう。AMD の概念と治療はめまぐるしく変わり, とにかくわかりにくいのである。この度, 上梓された吉村長久氏 (京都大学眼科教授) 執筆による『加齢黄斑変性』は, AMD をめぐる「もやもや」を吹き飛ばす快書である。

本書は5章からなる。第1章は基礎知識で, 混乱している AMD の疾患概念を明快に分類している。AMD のとらえ方は日本と欧米では異なっている。欧米ではドルーゼンの関与が大きいこと, 日本ではインドシアニングリーン (ICG) 蛍光造影や光干渉断層計 (OCT) の新技術が導入されてから AMD を扱うようになったことがその違いであるという。たとえばポリープ状脈絡膜血管症 (PCV) は ICG 造影なくしては診断できない。このことが日本で PCV が多い一因であるという。本邦からの論文が多く, わが国の貢献度の高さがうかがえる。血管新生の項は著者の基礎研究者としての素養がうかがえる。読者は第1章だけで AMD の全体像が把握できるようになったと感じるであろう。

第2章では, フルオレセインおよび ICG 蛍光造影, OCT, 微小視野などの検査法が実践的に書かれている。第3章は鑑別疾患であるが, 実は黄斑疾患学というべき内容である。中心性漿液性網脈絡膜症, 特発性傍中心窩毛細血管拡張症, 卵黄様黄斑変性などは, 最近概念が変わってきているので注目されたい。

第4章は PCV をめぐる諸問題である。PCV の病巣が OCT でどう反映されるか, PCV は新生血管なのか,

血管異常なのか, ホットな話題が組織標本とともに展開される。最も刺激的な話題はゲノムからみた PCV と AMD である。AMD は実は age-related ではなく, gene-related であること, AMD に関与する遺伝子がコードする蛋白は視細胞内節のミトコンドリアに局在しているというくだりは, ついに AMD の正体を垣間見たようでわくわくする。

最終章は治療の実際である。いままでに, 出ては消えていった治療法の利点と欠点が解説されている。現段階では抗 VEGF 療法が本命である。新規治療の導入に伴い, さまざまな大規模臨床試験が実施され, 学会ではそのデータがしばしば引用される。これらの臨床試験の勘どころが整理されているのはありがたい。

本書は基本的に個人が書いたものである。その点で近年まれな, 本らしい本である。分担執筆と異なり, 記述に一貫性があり, 著者の主張がある。文献の引用はていねいで, 学者としての姿勢が読み取れる。キャリアの大半を AMD 研究の最前線で過ごした著者でなければ, 俯瞰的で, かつ細部にこだわった本書の執筆は不可能であつたであろう。本書は内容が高度であるにもかかわらず, わかりやすく, 楽しみながら通読できる。AMD の治療と研究にたずさわる眼科医だけでなく, 一般に広く本書をお勧めしたい。

群馬大大学院教授・視覚病態学 岸 章治

●A4 頁 272 2008 年

定価 15,750 円 (本体 15,000 円+税 5%)

[ISBN978-4-260-00678-1] 医学書院刊